

当院における検査に適さない採血検体の削減に向けた取り組み

◎廣野 泰生¹⁾、久和 美咲¹⁾、上村 花奈¹⁾、星野 ひとみ¹⁾、草野 由美¹⁾
地方独立行政法人 東京都立病院機構 東京都立荏原病院¹⁾

【はじめに】臨床検査の重要な役割の一つは、適正な患者診療のために正確なデータを提供することである。検査のみならず検査前プロセスにおいても、検体採取と検体搬送の工程で生じる技術誤差の要因を分析し、随時改善を図り精度の維持に努めることが重要である。当院では、救急外来と病棟患者の採血は主に看護師が担当している。今回、我々は病棟より提出された検査に適さない検体（以下、不適切検体という。）の発生要因を分析し、その削減へ向けた取り組みとその効果を報告する。

【方法】対象期間は2023年7月～2023年10月。当院病棟より検体検査室へ直接または搬送台車システムにて搬入された血液検体7,508検体とした。不適切検体の発生要因の分析項目は、検体の凝固、溶血、採血量の過不足、搬入条件の不備、輸液混入、採血容器違いの6項目とした。血液検体の搬入時に検体検査室の受付者が検査システムに不適切理由を記録し、月別に集計を行った。

【活動内容】インシデントレポートの作成、採血に関する「検査科簡易マニュアル」の周知、検査科から看護師向け

の情報誌の発行、搬送台車システムの使用方法を記載したポスターの掲示、新入職員向けの講義。

【結果】対象期間中の不適切検体は171検体であった。そのうち再採取となったのは146検体、医師了承にて測定したのは25件であった。不適切の要因は、検体の凝固63検体、溶血37検体、採血量の過不足30検体、搬入条件の不備13検体、輸液混入11検体、採血容器違い2検体、その他不明15検体であった。各活動前後で全体の不適切検体数に変動は認められなかった。ヘパリンナトリウム入り採血管においては、搬入条件の不備が6件/月と増加したため、看護師向け情報誌の発行により平均2.75件以下/月まで減少した。

【まとめ】全体として不適切検体数を減少させることはできなかったが、検査室がその事象を記録して実態を分析することで適切な注意喚起を情報発信することができた。今後も不適切検体の要因分析と対策を継続し、検査精度の維持につながると考えられる。

【連絡先】東京都荏原病院 検査科 03-5734-8000